

### 第3章 歴史とポストコロニアル

—— ペルー、ウチュラハイ村事件と先住民族のテロ経験 ——

キーワード：ペルー、ポストコロニアル、先住民、記憶、暴力、歴史

細 谷 広 美\*

History and a Post-colonial nation :  
The Event of Uchuraccay and Experiences of Indigenous People  
in the Time of Violence in Peru

Key Words : Peru, post-colonial, history, memory, violence, commemoration

HOSOYA Hiromi

In this article I discuss the racial/ethnic elements of the time of violence in Peru. The time of violence began with the armed revolt of the Maoist group Shining Path in 1980. The final report of the Truth and Reconciliation Commission, which was presented to government in 2003, calculated that the number of victims between 1980 and 2000 was 69,280. One of the significant points of this report is that it demonstrates that 75% these victims were indigenous people. So there is major difference in victims depending on race /ethnic.

For the purpose of analyzing the factors of this disparity in the racial/ethnic group of victims, I focus especially on the famous event of Uchuraccay. Uchuraccay is an Andean village of Quechua speakers, where eight journalists were killed in 1983. The then Peruvian President, Belaúnde, organized a Commission to investigate this event, and denominated renowned writer Vargas Llosa as president of the Commission. After this event, Uchuraccay came to ruin through attacks by Shining Path and massacre by the Peruvian army. However, the discussions about this event have concentrated only on who killed the journalists, without regard to the situations of indigenous people. This is because there is major distance — racial, ethnical and cultural — between Lima (the capital) and the rural area where Shining Path started its rebellion.

So, first I analyze the experiences of people of Uchuraccay during the time of violence and the discourses of diverse socio-cultural groups about this event, considering the post-colonial situations of indigenous people in Peruvian society. Second, I discuss the some themes observed in the process of historizing and commemorating the time of violence.

---

\* 神戸大学国際文化部

はじめに	III. ウチュラハイ村事件と調査委員会
1. 国民国家の歴史と記憶	IV. 事件への道程
2. 暴力の時代と先住民族	V. 村落内部の葛藤とセンデロの侵入
3. 「階層」、ウチュラハイ村事件	VI. 事件前後
I. 先住民族とポストコロニアル	VII. センデロと政府軍による虐殺
II. センデロとペルー社会	おわりに — 真相究明と和解委員会、ポスト コロニアルの歴史 —

## はじめに

### 1. 国民国家の歴史と記憶

エルネスト・ルナンは「国民とは何か」のなかで、「忘却、歴史的誤謬と言ってもよいでしょう。それこそが一つの国民の創造の本質的因子なのです。だからこそ、歴史学の進歩は往々にして国民性にとって危険です。歴史的探求は、あらゆる政治構成体、もっとも有益な結果をもたらした政治構成体の起源にさえ生起した暴力的な出来事を再び明るみにだしてしまうからです」[ルナン1997: 47]と述べている。

国家がおこなってきた暴力、国民国家の形成過程で行使されてきた暴力は、往々にして国民を構成するために忘却することが期待される。そこには国家の領域内に居住する諸民族、諸集団を国民統合する際に行使された暴力も含まれる。これらの暴力の記憶は国民国家の歴史とはなりえず、国家が存続するために沈黙を強いられ、たまたま忘却の彼方へと追いやられる。

ルナンの言葉はラテンアメリカの現代史に照らし合わせた場合、新たな重みをもって響く。軍事政権下のアルゼンチンやチリでは多くの行方不明者 (desaparecido) がでている。リゴベルタ・メンチュウのノーベル平和賞受賞で知られるグアテマラでは先住民族の大量虐殺がおこなわれた。国民と記憶をめぐるテーマは、国家の暴力が決して過去のものとはなっていないラテンアメリカにおいては、アクチュアルな意味をもっている。

### 2. 暴力の時代と先住民族

ペルーでは毛沢東系の集団センデロ・ルミノソ (Sendero Luminoso、正式名はペルー共産党—センデロ・ルミノソ、以下センデロと略す)<sup>1)</sup>が、1980年にアヤクチャ

県で武装闘争を開始したことで、暴力の時代がはじまった。センドロのリーダーであるアビマエル・グスマン・レイノソ (Abimael Guzmán Reynoso) は、アヤクチョ県の中心アヤクチョ市にある国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学 (Universidad Nacional San Cristóbal de Huamanga) (以下ワマンガ大学と略す) の元哲学教授だった人物である。センドロの中心となったのは、メスティソ (混血) の若者たちであった。センドロに続き、1984年にはビクトル・ポライ (Victor Polay) をリーダーとする都市型のゲリラ・グループであるトゥバック・アマル革命運動 (Movimiento Revolucionario Tupac Amaru, 以下MRTAと略す) が蜂起した。センドロは毛沢東の教えにならい、「農村が都市を囲む」という戦略をとり、アヤクチョ県の農村部で活動をはじめた後、都市部に進出し、リマへと勢力を拡大した。そして、1980年代後半から1990年代初頭には国内全体が政治、経済、社会的に危機的状況に陥ることとなった。

1990年に大統領に就任した日系人のアルベルト・フジモリ (Alberto Fujimori) 大統領は、徹底したテロ対策をおこなう。これにより、1992年にMRTAのリーダーポライに続いて、センドロのリーダーであるグスマンが逮捕された。カリスマ的リーダーであるグスマンの逮捕により、テロ活動はようやく鎮静化していった。センドロによるテロ活動とそれを鎮圧するために派遣された政府軍の間に繰り広げられた戦いは、市民の不当逮捕や虐殺を引き起こし、「汚れた戦争 (guerra sucia)」の名でも呼ばれている。

2003年8月28日、この暴力の時代におこったことを解明する目的で組織された真相究明と和解委員会 (La Comisión de la Verdad y Reconciliación, 以下CVRと略す) による最終報告書が政府に提出された。この委員会はフジモリ大統領が2000年に日本に逃亡した後を引き継いだパニアグア暫定政権下の2001年に真相究明委員会を組織することが決定され、2001年の選挙で大統領に就任したアレハンドロ・トレド政権下において「和解」(Reconciliación) という言葉が付け加えられている。

真相究明と和解委員会の最終報告書は、1980年から2000年までの暴力の時代の犠牲者数が69280人であったと報告した。犠牲者数は、委員会の調査によって名前が確認された死者と行方不明者に統計的処理をして算出されている。また、犠牲者のうち、46%はセンドロによるもの、30%が政府軍をはじめとする国家によるもの、

1) センドロについてはGorriti [1990]、Scott (ed.) [1992]、NACLA [1990/1991]、Strong [1992]、選野井 [1995]、Stern (ed.) [1998] などがある。センドロをテロ集団と呼ぶか、ゲリラ集団と呼ぶかは意見の分かれるところであり、様々な議論がある。また、時間軸のなかでセンドロ自体の戦略も変化してきている。

24%がその他の原因によるものと報告された。その他の原因にはMRTA、農民自警団（*rondas campesinas*）、自警団（*comité de autodefensa*）等によるもの、戦闘のなかで判明しなかった犠牲者などが含まれる。

日本では1996年から1997年にかけて起こったMRTAによる日本大使公邸占拠事件があったことから、センデロよりもMRTAの方が知られているが、犠牲者数の割合からも明らかなように、当時ペルーにおいて最も大きな問題となっていたのはセンデロによる活動であった。暴力の時代には日本企業やODAも、センデロの攻撃の対象となってきた。1991年には国際協力事業団（JICA）が派遣していた日本人農業技師3名が脅迫をうけた後、殺害されるという事件が起こっている。

真相究明と和解委員会の調査が明らかにした重要な点のひとつは、死者のうち75%がケチュア語をはじめとする先住民族言語の話者であったことである。つまり、犠牲者のうち先住民族の割合が極めて高かったことが、数字という目に見えるかたちで示されたのである。犠牲者のうち79%が農村地域の人々であったことも指摘されているが、これは先住民族の多くが農村地域で農民として生活しているため、先住民族の犠牲者の割合が高いことと補足的関係にある。さらに40%以上が、センデロが武装闘争を開始したアヤクチョ県の犠牲者であったことが明らかになった。

### 3. 階層、ウチュラハイ村事件

広島で原爆ドームの下に人々の手の動きを投影しつつ、原爆の記憶をめぐる語りを読むパブリック・プロジェクションをおこなった、ポーランド出身アメリカ在住の現代美術家クシュイトフ・ウディチコ（1943年生まれ）は、カストロフィーのなかにも「階層」が存在すると語っている。それは被害の甚大さ、深刻さによる階層と同時に、被害を受けた人々の間の階層、及びその記憶のされ方、メモレションにおける階層をも意味している。ある語り手は、全身に火傷を負っていたにもかかわらず軍医に手当を拒まれた朝鮮人の一被爆者に言及している。そして、鉄や石をも溶かしたあの熱線も、「差別」の2文字だけは焼き尽くすことがなかったと語る [岸本2000]。

この言葉は暴力の時代に起こったことにもあてはまる。先述のように、暴力の時代を特徴づけているのは、犠牲者のうち先住民族の割合が極めて高いということである。別稿で筆者は暴力の時代にインディオや都市住民の間に広がったピシュタコという妖怪をめぐるうわさの、植民地時代との連続性について分析した [細谷2002]。暴力の時代において先住民族の犠牲者の割合が著しく高い理由としては、

もちろんセンドロが先住民族が住む農村部から武装闘争をはじめたという戦略上の要因もあるが、ペルーのインディオがおかれているポストコロニアルの状況を抜きにすることはできない。暴力の時代にテロ集団、政府、インディオとの間にあったのは、単にテロ集団及び政府軍や警察と一般市民という関係だけではない。そこには植民地宗主国スペインからの独立後も続いている、インディオと白人やメスティソとの間の人種間の関係や文化的相違が深く関与していた。

本章ではアヤクチョ県ワンタ (Huanta) 郡ウチュラハイ (Uchuraccay) 村で起こった事件を分析することを通じて、暴力の時代にみられた人種間のヘゲモニー関係、及び暴力の時代の記憶の歴史化の問題について検討する。ウチュラハイ村の事件はペルーにおいて暴力の時代の歴史をみるうえで、重要な出来事となっている。事件は政府がアヤクチョ県に政府軍を派遣した直後の1983年1月26日に起こった。8名の新聞記者がアンデス山中のケチュア語話者のインディオ農民の村で、センドロのメンバーと誤った村人たちに殺害されたのである。記者たちは隣村のワイチャオ村 (Huaychao) で起きた、インディオ農民がセンドロのメンバーを殺害したという事件の真相を取材に行く途中であった。この報道に対し、国内外のマスメディアや人権団体等は、記者たちを殺害したのは村人ではなく、政府軍ではないかという疑問を抱いた。

このため、当時のフェルナンド・ベラウンデ・テリー大統領 (Fernando Belaúnde Terry) は、事件の真相を解明する調査委員会を組織し派遣した。調査委員会の委員長には、ノーベル文学賞候補にもなった国際的に著名な文学者マリオ・バルガス・リョサ (Mario Vargas Llosa)<sup>2)</sup> が任命された。また、事件がケチュア語話者であるアンデスのインディオ農民の村で起きたことから、アンデス世界の専門家である人類学者、歴史学者、言語学者なども調査に参加した。

海拔4000mに達する広がりをもつ山中にある村で、半コートを着てサングラスをかけ、ヨーロッパの都市からそのまま降り立ったような姿の白人のバルガス・リョサと、その前に並ぶ高地の厳しい寒さと強い太陽の光に鍛えられた肌をし、ポンチョを着て素足にオホタ (古タイヤで作ったサンダル) を履いた先住民族たち。調査委員会の調査の模様を伝える当時の写真は、それ自体が象徴的であり、既視感をともなった奇妙な印象を与えるものとなっている。

---

2) (1936- )ラテンアメリカを代表する人気作家の一人。『都会と犬っころ』、『緑の家』、『世界の終わりの戦い』など多くの小説を發表している。1990年の大統領選に出馬し、日系人のアルベルト・フジモリに敗れている。

調査委員会の報告書は、記者たちを殺害したのはウチュラハイ村の村人たちであると結論づけた。しかし、誰が記者たちを殺害したかをめぐって議論が続けられてきている。が、他方でその後村で起こった虐殺によってウチュラハイ村自体が消滅してしまった事実が目が向けられることはこれまでほとんどなかった。

このようなことから本章は、先住民族の視点からこの事件を分析すると同時に、事件をめぐる多様な言説を、互いに異なる社会、文化的空間の文脈のなかに位置づけ検討する。ただし、筆者はウチュラハイ村でのインタビュー調査をはじめとする調査研究において収集した資料を整理、分析し、さらなる調査を進めている段階にあり、本章は予備的考察という性格をもつ<sup>3)</sup>。

## I. 先住民族とポストコロニアル

暴力の時代及びウチュラハイ村事件を人種・民族間の関係を視野に入れて考察するためには、まずペルー社会におけるインディオ＝先住民族<sup>4)</sup>とはどのような存在であるのかということをはっきりと明らかにしておく必要があるだろう。

ベネディクト・アンダーソンは国民国家を論じるうえで基本文献となっている『想像の共同体』[アンダーソン1987]の序文で、国民を論じる際に、国民は実際には小文字ではじまるnationとして考察されるべきところを、往々にして大文字ではじまるNationとして考察されていると指摘している。筆者はアンダーソンが指摘したのと同じ意味で、インディオという存在についてもすでに各国内で個別化してし

3) 本章の基盤となる調査研究には平成11年－平成12年科学研究費補助金奨励研究A「現代ペルーにおけるインディオ像と歴史観の関係をめぐる研究」、平成13年度～16年度科学研究補助金基盤研究A海外学術調査「現代ペルーの社会動態に関する学際的調査—比較研究のための視角構築」(代表 国立民族学博物館地域研究企画交流センター教授山田睦男)の研究助成を受けた。ペルーでのフィールドワークでは、ウチュラハイ村の人々、ペルー問題研究所(IEP)の援助を受けた。国立民族学博物館地域企画研究センター助教授の村上勇介氏には研究の遂行上様々なサポートを受けた。筆者が現在勤務する神戸大学国際文化学部アメリカ文化論講座の同僚には、ペルーでフィールドワークをおこなうための便宜をはかっていただいた。本章の草稿段階で、国立民族学博物館の共同研究会「ラテンアメリカの社会システム再考」(木村秀雄東京大学教授代表)で発表し有益なコメントをいただいた。記して感謝の意を捧げたい。また、本章はHosoya [2003]と一部重複する部分がある。

4) インディオという単語自体はスペイン語において「indio (インディオ)」と言った場合、一種の差別用語になる。「先住民族」という場合には英語のindigenous peopleにあたる「インディヘナ(indigena)」という言葉が用いられる。日本語の文献においては、これまでラテンアメリカの先住民族に関しては「インディオ」、少し古い文献では「原住民」という言葉が用いられてきた。本章では、混乱を避けるためラテンアメリカの先住民族を指す日本語の慣用表現として、「インディヘナ」に相当する単語として「インディオ」という言葉を用いる。

まっていることから、大文字ではじまるインディオだけではなく、小文字ではじまるインディオとして考察する視点が必要であると考え。それは次のような理由による。

インディオという存在には2つの歴史的転換点がある。第1の転換点は、ヨーロッパ人がそれまで知らなかった新しい大陸を発見したという出来事とともに起こった。重要なのは発見の主語である。アメリカ大陸は太古の時代から地球上に存在しており、大陸には約1万4000年前から人類が住んでいた。しかし、1492年にヨーロッパによって発見された。周知のように、発見者であるコロンブスは、自らが到達したのがヨーロッパの人々にとって未知の大陸であったことを終生知らなかった。彼は当時ヨーロッパでインディアスと呼ばれていたアジアの一部であると考えたのである。大陸はこの大陸がヨーロッパの人々にとって「新しい世界」であることに気づいたアメリゴ・ヴェスプッチの名をとって、アメリカ大陸と名づけられた。すでに存在していたアメリカ大陸が「新」大陸と呼ばれ（新があるからには旧が存在している）、さらにヨーロッパ人の名前をとってアメリカ大陸と命名されたことは、世界史上の大陸の位置付けを明確に示している。

そして、ヨーロッパによる「発見」とともに、新大陸の住民はすべてインディオとなった。メキシコの人類学者ギジェルモ・ボーンフィル・バターリエ [Batalle 1972] が的確に指摘したように、「発見」以前に新大陸にインディオは存在しなかったし、インディオに相当する概念も存在しなかった。新大陸に存在していたのは、多様な王国や民族集団であり、そうした大陸の住民すべてを総称するような言葉も概念も存在しなかったのである。つまり、インディオという存在は、「発見」とともにヨーロッパ人によって創出された存在である。レヴィ＝ストロースの構造主義の概念を借りれば、インディオはヨーロッパ人の補完的対立項として創出された。そして、以後、インディオは文明化されたヨーロッパ人に対して、未開、野蛮、非合理的という形容詞を付与されていく。

インディオをめぐる第2の転換点は、植民地宗主国からの独立である。スペインによる植民地支配を受けた南アメリカ諸国の独立は、クリオーリョ (criollo) たちを中心としておこなわれたことに特徴がある。クリオーリョとはスペイン本国出身の白人ペニンスラール (peninsular)<sup>5)</sup> に対して、新大陸で生まれ育った白人たちに与えられた名称である。クリオーリョであるためにはインディオや黒人の血が混じ

---

5) スペインがイベリア半島にあることため「半島出身者」の意味からきている。

っていないことが条件であった。植民地時代が続くことで、新大陸生まれのクリオーリョの数は増大していき、彼らは本国出身のペニンスラールたちが優位にあることに不満をつのらせ、独立を決意した。つまり、植民地宗主国からの独立は、「発見」という歴史的起点において征服され植民地支配を受けた人々にとっての独立を意味してはいなかったのである。

19世紀初頭に植民地宗主国からの独立を達成すると、クリオーリョたちの政治的駆け引き、幾度かの戦争のなかで、南アメリカ諸国の国境線は確定していく。これにより、各国の領域内に居住するインディオたちはそれぞれの国家の国民になった。ただし、この時点では国民という括りは外からの枠組みであり、必ずしも実体をともなっていなかった。そして、独立後の国民国家建設においてインディオは国民統合の対象となり、各国でそれぞれ独自に定義されてきた。また、国民統合の過程で各国がとった政策により、インディオという存在自体も国境の内部で変化してきた。つまり、各国においてインディオがどのように規定され、またインディオと規定された人々がそれをどのように内面化するかによって、さらにこれらの相互作用によってインディオという存在は創られてきたのである。このレベルにおいてインディオはより明確に小文字のインディオという存在になってきた。

本章で扱うペルーにおいては、インディオを指す言葉として、スペイン語で先住民族を意味する「インディヘナ(indígena)」より、「農民」を意味する「カンペシーノ(campesino)」という名称の方が一般的に用いられる<sup>6)</sup>。ペルーのインディオの大半がアンデスの山岳部で農業に従事しているため、彼らを「<sup>カンペシーノ</sup>農民」と呼ぶことに実際との大きなずれはない。しかし、インディオという存在を彼らの生業を指す言葉によって表象してしまうことは、単なる言葉の置換にとどまらない、彼らの存在の位置づけそのものにかかわる変換を意味する。すなわち、そこには彼らのもつ歴史的背景や文化的独自性を隠蔽してしまうことになるという陥穽が横たわっている。

ペルーの人類学者カルロス・イバン・デグレゴリは、ペルーには農民運動は存在しても、ラテンアメリカの他の国のように、先住民族運動が存在しないことを指摘している [Degregori 2000]。たとえば征服時にアステカ王国があり、現在も比較的先住民族人口が多いメキシコでは、革命後インディオを国民化するための政策が様々なかたちでとられ、同時に主として言語を基盤に各エスニック・グループの境

6) ペルー革命をおこなったフアン・ベラスコ政権下(1968-1975)で、先住民族共同体(comunidad indígena)は農民共同体(comunidad campesina)へと名前が改められ、「先住民族の日」も「農民の日」と改められた。

が構築されてきた。しかし、相対的にみるとペルーでは、明確な政策によってインディオという存在の境界が設定され、その実体が構成されていくことはなかった。インディオ自身の間でも、特定の地域や村の住民としての意識やアイデンティティはあっても、「我々インディオ」というアイデンティティが構成される場は築かれなかった。つまり、ペルーにおいてインディオは一義的に特定の地域の住人であり、それを越えてのインディオという紐帯は形成されなかったのである。

それではペルーのインディオを民族集団<sup>エスニック・グループ</sup>という観点からみた場合は、どのようにとらえることができるだろうか。ペルーのインディオの大半はケチュア語を話す。その他、プーノ (Puno) 県ではアイマラ語 (aymara) も話されている。アイマラ語はボリビアのインディオたちの間で広く話されている言語である。ティティカカ湖をはさんでボリビアと国境を分けているプーノ県では、祭りや芸能や慣習においてもボリビア側のアルティプレーノ (Altiplano) の文化とのつながりが深い。

また、セルバ (selva) と呼ばれる低地の熱帯雨林地帯には、様々な小集団が散逸して居住している。セルバはもともと人口密度が低く、狩猟採集や焼畑をおこなう移動性が高い人々が居住していた地域で、インカ帝国も制圧することができなかった。低地に住むインディオはインカ時代からチュンチョ (chuncho) と呼ばれ、高地に住むインディオとは区別されてきた。熱帯雨林地帯では様々な国々が国境を接しており、この地域に住む諸民族は現在国境によって分断され固定されている。では、ペルーの先住民族人口のうち大半を占めるケチュア語話者について、共通の言語を話すことでケチュア族という一つの民族集団として分類することはできるのだろうか。ケチュア語はインカ帝国の公用語であった言語で、インカ帝国の拡張とともにアンデス地域に広がった。その後、スペインによる植民地統治にも用いられ広がっている。その話者はアンデス諸国にまたがり約600万人いるとされている。インカ帝国は15世紀前半から勢力を広げ、1532年に征服者フランシスコ・ピサロによって皇帝アタワルパが捕縛され幽閉された後、翌1533年に処刑されている。つまり、インカ帝国の拡張から崩壊までの期間は約100年程度であった<sup>7)</sup>。

このようにケチュア語が広範囲に普及してから、インカ帝国が滅びるまでの期間は非常に短く、現在のケチュア語話者の範囲に相当するかたちでケチュア族と呼べる実体やアイデンティティが構成されることはなかった。一方で多様な民族を征服

7) ただし、アタワルパの死後、マンコ・インカが蜂起し、ビルカバンバでインカ王朝を展開したので、トゥパック・アマルが処刑された1572年をインカ帝国の滅亡の年とする見方もある。

することによって広まったケチュア語は、地方による差異も大きい。それ故アンデスのケチュア語話者に対してケチュア語族という言語的括りをすることは可能であるが、ケチュア語を話すからといって、彼らをケチュア族という民族集団として分類することは必ずしも実態にそぐわない。ケチュア語を話す人々の間には多様な民族的背景が内包されているだけでなく、そこには「我々ケチュア族」というエスニック・アイデンティティも存在していないからである。

さらにここにもう一つ、インディオとメスティソの境界の問題が存在する。統計上で誰がインディオであるかを分類する際には、概ね言語が用いられる。つまり、インディオであるか否かということに関しては、先住民民族言語を話すかどうかということが分類の基準となっている。この先住民民族言語を話すかどうかということは、実際には極めて微妙な基準である。たとえば日本人に対して、英語を話すことができるかどうかという質問をした場合を想定するとしよう。明確な基準を設けない限り回答はまちまちであるというだけでなく、そもそも基準を設けること自体が難しい。しかも、もし母語が英語であると答えると、帰国子女などのケースでも所属する民族集団としては英語の民族集団として分類されてしまうことを意味する。

それだけではない。特定の言語を話すことができるかどうかということで所属する民族集団を分類することは、ある程度指標になっても、そこには複雑な社会的要因が絡んでくる。ペルーの場合ケチュア語のバイリンガル教育はおこなわれていず、学校教育はスペイン語教育を意味する。このため、読み書きができる、すなわち文盲でないということは、スペイン語の読み書きができることを意味する。つまり、両親がケチュア語話者であっても、子供たちは学校教育を受けることによってスペイン語を学んでいる。特に都市部においては、社会的上昇の手段としてスペイン語を学ぶことが強く期待される。この場合、言語を基準にすると、統計上は両親が先住民民族として分類されても、子供たちはメスティソとして分類されるということが生じる。

しかも、これは統計上の問題だけではなく、現実の社会においても、両親がインディオであっても、その子供たちはメスティソとなっているということが起こっている。インディオの子として生まれても、スペイン語を習得し、社会的地位や富を獲得すればメスティソとして分類されうる。混血が進んだラテンアメリカにおいては、明確な人種間の差別が存在する一方で、インディオとメスティソの間の境界にはある程度の流動性がみられる。人種が外見上の身体的特徴のみによる区分ではなく、社会文化的な分類であるとされるのはこのようなことに所以する。

ちなみにラテンアメリカにおける混血神話は混血をめぐるこうした状況を背景として生まれてきている。メキシコのホセ・バスコンセロス (José Vasconcelos)<sup>8)</sup> の言葉「宇宙的人種 (raza cósmica)」に代表されるように、ラテンアメリカの国々は人種的、文化的混血によって特徴づけられてきた。しかし、この思想は両義的であり、ラテンアメリカの国民国家建設においては国民を創出していくことと深く結びついてきている。歴史的には国家のエリート層が人種の優劣を前提としているからこそ、インディオや黒人がもつ「後進性」がより少ない「近代化」した国民を生み出すために、混血を提唱してきた経緯もある。本章では紙面の都合上詳しく議論することはできないが、国民統合の文脈におけるメスティソ化は、往々にして国民化を意味してきた。

ペルーの場合、インディオの国民化の脈絡でメスティソ化に近い意味で用いられるのが、チョロ化 (cholificación) という言葉である。チョロ (cholo) という単語は歴史的に古く、文脈によって様々な使われ方をしている。現在では一般に、都市に移住した山岳部の農村出身者を指す。しかし、チョロは厳密には都市に移住したインディオのみを指すのではなく、山岳部出身で都市に移住したメスティソもチョロの範疇に入る<sup>9)</sup>。近年用いられるチョロという言葉は、ペルーの首都リマにおいて山岳部からの移住者が急速に増加し首都への人口集中が顕著になった時期に、リマのアンデス化をめぐる議論とともに使われてきている<sup>10)</sup>。

以上みてきたように、ペルーにおいてインディオは農村部に住む場合は「農民」であり、都市にでた場合はチョロとなる。そして、そこにはインディオという独自の文化的背景、歴史的背景をもった存在としての場は存在しない。それではインディオが登場するのはどのような脈絡においてかという点、それはペルーのナショナル・アイデンティティを形成するうえで、先スペイン期の古代文明や国民文化について言及するときである。この問題についてはすでに別稿 [細谷1997, 2000b; Hosoya 2002] で論じてきているので、本章ではあらためて論じることはしない。重要なのはペルーではインディオはインディオという集団を構成してきていず、し

8) (1881-1959)。メキシコの政治家で革命後文部大臣を務めた。La raza cósmica. México, D.F.: Colección Austral, 1948, を著している。

9) ペルー出身の人類学者エンリケ・メイヤーはペルーでは空間的に移動するだけで、インディオにもメスティソにもなりうると指摘している [Mayer 1970]。つまり、山岳部の農村でメスティソとして分類されている個人が、都市や首都リマをはじめとする海岸部に移住した場合はインディオとして分類される。このようなことも、誰をチョロとするかということと関わる。

10) 都市のアンデス化とチョロをめぐる議論の代表的なものとしてはQuijano [1980]、Matos [1984]、などがある。

かも民族集団を構成することもなく、地域を越えての発話の母体をもちえずに国民統合の対象となってきたという点である。これは、ペルーにおいて、インディオが集団を構成しないサバルタンとなっていることを意味する。

さらにここにもう一つの陥穽が存在する。インディオが農村をでて、スペイン語を習得し、社会的地位が上昇した場合、メスティソになってしまうということは、逆にいえばインディオは農村にいて先住民族言語を話している限りにおいて、インディオであるということである。このことは、発話するインディオはすでにインディオではないというパラドックスを構成してきた。

整理すると、ペルーのインディオは植民地支配とともに社会の最底辺におかれた。独立によって支配の頂点にいた層、すなわちペニンスラールはいなくなったが、人種的観点からみた場合、白人層が優越しているというその支配構造自体は大きく変わらなかった。これが、インディオの人々にとってのポストコロニアルである。そして、現在に至るまで集団を構成しないまま、社会の最底辺に無防備におかれている。スピヴァクは「サバルタンは語るができるか？」[スピヴァク1998]のなかで、サバルタンの発話の問題について論じているが<sup>11)</sup>、集団を構成しないまま、発話できず、社会の最底辺のサバルタンとなっている存在が現在のペルーのインディオである。暴力の時代、及び本章で扱うウチュラハイ村の事件はペルーのインディオを取り巻くこのような周辺状況のなかで展開した。

## II. センデロとペルー社会

センデロの武装闘争の展開とウチュラハイ村の事件を考察するうえで、ペルー社会に内在する人種間のヘゲモニー関係と密接に関わる、コスタ (costa、海岸部) とシエラ (sierra、山岳部) の関係ははずすことができない。ペルーの自然環境は6000m級の山々を含むアンデス山脈が南北に縦断することで、高度差に応じた非常に多様な環境が生まれており、大きくコスタ、シエラ、セルバに分けられる。コスタは太平洋岸に面した海岸部で砂漠地帯を含む。シエラはアンデス山脈がある山岳部で農村地帯である。セルバは熱帯雨林地域である。しかし、この区分は単なる自然環境の区分ではなく、同時に社会・文化的区分ともなっている。

シエラはインカ帝国の首都クスコがあった地域であり、現在も先住民族人口が多

11) サバルタンと集団、歴史的記述の問題については細谷 [2000a]、崎山 [2001]などを参照。

い。ちなみにクスコは海拔約3400mの高地にある。つまり富士山頂とあまりかわらない高度に帝国の中心が位置していたのである。コスタには首都リマがある。リマは植民地時代にスペイン人が太平洋岸に建設した街で、現在もコスタには白人、メスティソが多く住む。他方、セルバはもともと人口密度が低い地域で、先住民族が小集団に分かれて住んできた。このようなことから、ペルーにおいては伝統的に、西洋的世界を構成するコスタと、アンデス世界を構成するシエラの間をめぐって様々な議論がおこなわれてきた。そして、シエラとコスタはアンデス山脈という天然の城壁に遮られ、互いに異なる世界を構成してきた。

センデロの最初の武装蜂起は、1980年5月17日にアヤクチョ県カンガーリョ (Cangallo) 郡チュスチ村 (Chuschi) でおこなわれた。アヤクチョ県は、シエラに位置するペルーのなかでも最も貧しい県の一つであり、先住民人口が多い。センデロの組織化にはアヤクチョ市にあるワマンガ大学の再開が重要な意味をもっていた。ワマンガ大学は1677年に創立されたアメリカ大陸全体を見渡しても古い大学であるが、1885年以降閉鎖されていた。現在のアヤクチョ市は手工芸品を除いてはこれといった目覚しい産業もない街である。教会の数の多さが植民地時代の繁栄の跡をとどめる。近郊の村キヌア (Quinua) では、南アメリカの独立を決定づけた「アヤクチョの戦い」が繰り返された。街を一步でれば農村地帯が広がるアヤクチョ市において、1959年にワマンガ大学が再開されたことは、農村出身の若者にも高等教育を受ける機会を提供することになった。そして、センデロはこのワマンガ大学を拠点として組織化されていったのである。このため、センデロの中核となったのは都市に居住するメスティソの若者たちであった。

後にセンデロのリーダーとなったグスマンは、1962年にワマンガ大学の哲学の教員として就任した。グスマンは1934年にアレキパ (Arequipa) 県で生まれ、大学ではカント哲学を研究した。彼は若い頃にペルー共産党に入党し、アヤクチョ市で地区小委員会の委員長となった。その後組織内の分裂のなかで党を追われたグスマンは、毛沢東系のセンデロを組織した。センデロ・ルミノソ (輝ける道) という組織の名称は、20世紀初頭に活躍したペルーの特異なマルクス主義の政治思想家ホセ・カルロス・マリアテギ (José Carlos Mariátegui)<sup>12)</sup> の言葉からとられている。

センデロの武装蜂起は、ファン・ベラスコ大統領 (Juan Velasco, 1968年～75年

12) (1894-1930)。南部モケグア (Moquegua) の出身で雑誌『アマウタ』(Amauta) を発刊するとともに、政治、文学評論に及ぶ幅広い活動をおこない、『ペルーの現実解釈の七評論』をはじめとする多くの著作を出版している。

在任)がおこなった農地改革によって、アシエンダ (hacienda、農園) を所有していた農村部の旧権力層が排除され、権力の空白地帯が生まれた時期に相当していた。

ただし、ここで留意しておくとしてセンドロが最初の武装蜂起をおこなったチュスチ村は、決して閉鎖的な先住民族共同体ではなかった。チュスチ村については、センドロの武装蜂起前に博士の学位論文執筆のためにフィールドワークをおこなったビージェ・ジーン・イズベルの民族誌が出版されている [Isbell 1978]。アヤクチャョ県はもともとリマへの移住者が多い県で、移住者たちは移住後も共同体の成員としての権利を維持し、影響力を持ち続けてきている。イズベルの民族誌のなかでも、移住者たちがいくつかの改革を村にもちこんだことが記述されている。

センドロの武装蜂起がはじまった当初、政府はその活動を軽視していた。このため、その制圧には軍隊ではなく、シンチス (shinchis) と名づけられた特殊警察が派遣された。この理由としては、文民政権が誕生した直後で政府が再び軍隊を動かすことを躊躇したこと、リマにマスメディアが集中しているというペルーの情報環境などがあげられる。しかし、見過ごしてはならない要因として、アンデス山脈の向こう側のインディオたちが住んでいる地域でおこっていたことに政府が重きをおかなかったことを指摘できる。

以上のことから、暴力の時代をみるうえでは、先住民族が多く居住するアヤクチャョ県の農村部、メスティソが多いシエラの地方都市アヤクチャョ市、首都リマという互いに異なる3つの社会・文化的空間を分けて考察する必要がある<sup>13)</sup>。

### Ⅲ. ウチュラハイ村事件と調査委員会

ここでまず、ウチュラハイ村の事件に関する調査委員会の報告書 [Comisión Investigadora de los Sucesos de Uchuraccay 1983] と、バルガス・リョサが事件後ペルーの新聞『エル・コメルシオ』 (*El comercio*) 紙に執筆した記事 [バルガス・リョサ1990] を中心に、当時の新聞や雑誌記事で補足しつつ事件の概要をみていくことにしよう。

1983年1月23日にウチュラハイ村の隣村であるワイチャオ村で一つの事件が起きた。それは村人たちが、7人のセンドロのメンバーを殺害したという事件である。ワイチャオ村はワクタ郡とタンボ郡の間の山岳部に位置しており、ケチュア語を話

13) このような関係は先住民族人口が多い農村部、メスティソが多い山岳部の都市、リマというかたちで他県でもみられた。

す人々が住むインディオの村だった。

当時センデロが農村部でどのような活動を展開しているのか、都市部のアヤクチョ市では十分知られていなかった。ましてや、首都リマでは情報が乏しかった。一方都市部の左翼系の人々や反体制派の人々の間には、センデロは貧しいインディオ農民のために闘っているグループであるというイメージがあり、そのセンデロを農民が殺害したという事実を理解することが困難だった。それ故、センデロのメンバーを殺害したのは、本当はシンチスもしくは政府軍ではないかという疑惑が生まれた。殺害されたセンデロのメンバーのなかに、14、15歳の子供が含まれていたことも疑問を呼び起こした<sup>14)</sup>。

このため8名の記者たちはワイチャオ村で何が起こったのかを自らの目で確かめ、事件の真相を明らかにするために村に向かった。彼らは異なる新聞社や雑誌社の混成チームだった。8名の記者たちのうちアマドール・ガルシア (Amador García) は、リマで発行されている週刊誌『オイガ』(Oiga) 誌の報道カメラマンだった。彼はアヤクチョ県生まれだった。ウィリー・レット (Willy Retto) とホルヘ・ルイス・メンディビル (Jorge Ruis Mendivil) は『エル・オブセルバドール』(El observador) 紙の記者だった。レットは『ウルティマ・オラ』(Última hora) 紙の報道カメラマンの息子で、彼自身もカメラマンだった。同じ新聞社で働いていたルイス＝メンディビルはまだ22歳だったが、左翼系の組織に属し熱いジャーナリスト魂をもっていた。最年長で51歳のホルヘ・セダノ・ファルコン (Jorge Sedano Falcón) は、『ラ・レプブリカ』(La república) 紙のカメラマンで記者としての人気が高く、バルガス・リョサとも親交があった。エドワルド・デ・ラ・ピニエーニャ (Eduardo de la Piniña)、ペドロ・サンチェス (Pedro Sánchez)、フェリクス・ガビラン (Felix Gavilán) はマルクス主義系の新聞『エル・ディアリオ・デ・マルカ』(El diario de marka) 紙の記者だった。3人のうちガビランはアヤクチョ県の出身であり、アヤクチョ市で支局員をしていた。オクタビオ・インファンテ (Octavio Infante) も同じくアヤクチョ県出身で、アヤクチョ市で『ノティシア』(Noticia) 紙を発行していた。

記者たちは、いずれも白人系もしくはメスティソであり都市に住んでいた。山岳部のインディオの間では、白人、メスティソはインディオではない(非インディオ)という意味においてミスティ (misti) として分類される。つまり8名はインディオ

14) 現実には当時センデロは子供たちを誘拐し、強制的に同行させていた。このため、誘拐された少年、少女がセンデロのなかに含まれていたのは、あり得ることだった。自らの教義に基づき家族という単位を尊重しなかったセンデロは、支配した村で夫と妻、子供と両親を分け、それぞれのグループにセンデロ教育をおこなうということもしている。

の人々からみればミステイたちであった。ただし、アヤクチョ県出身のガルシア、ガビラン、インファンテの3名はケチュア語を話すことができた

8名の記者のうちガビランとインファンテを除く6名は、事件がおこった前日にリマからアヤクチョ市に到着した。アヤクチョ市から加わったインファンテは、計画の遂行上枢軸となる役割を果たした。インファンテの母方の家族がワイチャオ村に向かう途中のチャカバンバ (Chacabamba) に住んでいたため、その地域の地理に明かったからである<sup>15)</sup>。記者たちが向かうワイチャオ村は山中にあり、当時はまだ車道が通じていなかった。しかも1月は雨季であり、あちらこちらで土砂崩れがおき山中の道の状況はよくない。車で行けるところまで行った後は山道を歩いていかなければならなかったので、道案内が必要だった。

記者たちは前日に最終目的地を告げずにタクシー運転手のエンリケ(仮名)とヤナオルホ (Yanajorjo) まで行く契約をした。その際、前金を半額払って翌朝5時に記者たちが滞在していたホテル、サンタ・ロサ (Santa Rosa) に迎えに来るよう頼んだ。

翌朝1月26日水曜日、エンリケは5時20分に記者たちをホテルに迎えにきた。その後インファンテとガビランを迎えに行き、ラ・マグダレーナ (La Magdalena) の検問所を通してアヤクチョの街をあとにした。検問所ではほとんどフリーパスに近い状態だった。運転手のエンリケは車中でようやく記者たちがワイチャオ村を目指していることを知った。記者たちはヤナオルホを通り、トフト・コチャ (Toqto Qocha) を過ぎて700m位のところで降りた。ヤナオルホにある電波塔はたびたびセンデロの攻撃を受けていた。エンリケはそのことを記者たちに告げたが、彼らは大して気にしなかった。エンリケは残りの金を受け取るとアヤクチョ市へと帰っていった。

車を降りた記者たちは、インファンテの母の家があるチャカバンバに向かって歩いた。リマから来た記者たちにとって、アンデスの険しい山道を歩くだけでも大変なことであったが、スペイン人たちも悩ませた酸素の薄い高地でおこる高山病 (sorroche、ソロチェ) が追い討ちをかけた。インファンテの母は息子の姿をみると一行を喜んで迎え入れた。インファンテの母テレサ(仮名)の家には、テレサとその夫、インファンテの異父兄弟であるファン・アルグメドとその妹ラウラ(仮

15) 調査報告書には記録されていないが、筆者のインタビュー調査ではインファンテの母テレサはアヤクチョ市で働いていた際に身籠っている。このためインファンテは白人の血が混じった容顔をしており、アヤクチョ市に住むことでミステイに相当していた。

名)、フアンの妻であるアナ(仮名)等が集まった。インファンテは異父弟のフアンに道案内と家畜の借用を依頼した。記者たちの中で最も年長でありこれ以上歩けそうもなかった巨漢のセダノを乗せるためと、荷物を運ぶために必要だったからである。アルグメドは1頭の馬と1頭のラバを賃貸しすることを承諾した。しかし、道案内に関してはウチュラハイ村の手前の峠までのみ同行するという条件で承諾した。

インファンテはその日の晩には戻るのに食事と毛布を用意しておいて欲しいと母に告げて家を後にした。が、テレサは土地の人間ではない記者たちに、そのような強行軍は無理ではないかと考えていた。記者たちがインファンテの母の家に寄ったのは、15分たらずだった。

翌朝、1月27日木曜日、インファンテの母テレサはウチュラハイ村で事件がおき、アルグメドといっしょに行った人々が殺されたことを少年の口からきいた。このため、テレサとラウラはウチュラハイ村へと向かった。フアンの妻のアナも遅れてウチュラハイ村に向かった。ウチュラハイ村には近隣の村人も含めた多くの人々が集まっていた。そして、彼女たちを囲み、テロリストの仲間であるから殺そうと叫んだ。幸いにもウチュラハイ村の村人でテレサがマドリナ<sup>16)</sup>になっている村人の弁護もあり、村人たちは彼女たちを殺すことは思いとどまり村の一室に閉じ込めた。

一方、新聞社は記者たちの消息が途絶えたことから警察に届けた。このためウチュラハイ村をはさんだワンタとタンボ(Tambo)の双方の街に捜索が命じられた。そして1月28日金曜日の夜に村に車が到着し、翌日通訳を介して村人たちへの尋問がはじまった。ウチュラハイ村の人々は村にやってきた8人のセンデロのメンバーを殺害したと告げ、その墓と所持品を示した。リマとアヤクチュヨ市の当局者たちは1月29日土曜日に8人の記者たちにおこったことを知った。

殺害され埋められた記者たちの遺体が発掘される映像は、マスメディアを通じて1月30日日曜日にリマの平穏な日常生活のなかに流れた。傷ついた記者の遺体写真を掲載する新聞もあった。それらは非常にセンセーショナルな写真だった。当時、テロの危機を感じていなかったリマの人々は、この事件を異常なこととしてとらえた。そして、無知で野蛮なインディオ=農民たちが引き起こした残虐な事件として受け止められた。

ここで指摘しておく、もしウチュラハイ村の事件を伝える映像が8年後に流れ

16) 擬制親族の一種でカトリックの宗教的慣例に基づき、アンデス社会で独自の関係を形成している。カトリックの洗礼式の子供の教父はパドリノ(padrino)、教母はマドリナ(madrina)と呼ばれ、親同士の関係はコンパドレ(compadre)、女性はコマドレ(comadre)となる。

ていたとしたら、リマの人々は異なった印象を受けたであろう。その時はすでにリマの中産階級以上の人々が住む、つまり白人の人々も住むサン・イシドロ (San Isidro) 区やミラフロレス (Miraflores) 区においても、センデロによる本格的な攻撃がはじまっていたからである。「農村が都市を囲む」という戦法をとっていたセンデロは、アヤクチヨ県の農村部で攻撃を開始した後アヤクチヨ市に向かい、1980年代後半からはその攻撃対象をリマに移した。しかし、リマへの攻撃がはじまった時点では、その主たる対象はシエラからの移住者たちが居住するリマ郊外に広がる貧困地区や国立大学<sup>17)</sup> 等であった。このため、リマの中産階級以上の人々がテロの危機を強く意識するようになったのは90年代に入ってからである。テロの危機を全く感じる事がなかった日常生活のなかに侵入した異質な映像は、事件の異常さのみが強調されたかたちで、インディオ＝農民に対する偏見とともにリマの人々に受け止められた。

当時のペラウンデ大統領は国内外の人権団体やマスメディアからの追及により、事件の真相を解明するための調査委員会を組織することを余儀なくされた。殺害をおこなったのがシンチスもしくは政府軍ではないかという疑いを抱いてワイチャオ村に向かったその記者たちが殺害されたことにより、記者たちは事件の真相を揉み消すために殺害されたのではないかという新たな疑惑が生じたからである。政府はこの疑惑を晴らす必要があった。

このため、高名な文学者バルガス・リョサ、ジャーナリスト学校のペドロ・カストロ・アレナス (Pedro Castro Arenas)、法学者のアブラハム・グスマン・フィゲロア (Abraham Guzmán Figueroa) からなる調査委員会が組織された。与えられた期間には30日間だった。調査委員会には、事件がリマとは人種的にも文化的にも言語的にも異なるアンデスの先住民族の村でおこったことから、司法の専門家の他にアンデス世界を専門とする著名な学者も加えられた。そのなかには人類学者ファン・M・オシオ (Juan M. Ossio)、フェルナンド・フエンサリダ (Fernando Fuenzalida)、歴史民族学者ルイス・ミリヨネス (Luis Millones) などが含まれていた。

記者たちの遺体がリマへと移送された日には、首都の通りに人波が溢れた。常に意見が対立しまとまることのないペルーの左翼系の人々やグループが、これほど一致して共通の目的のために集まったことは、それ以前にも、それ以後にもなかったと回想されている。

17) ペルーでは、ピエール・ブルデューの文化資本の議論のように、国公立の学校と私立の学校に格差があり、エリート層の子弟は私立学校に通う。

調査委員会は3月にベラウンデ大統領に報告書を提出した。報告書はウチュラハイ村の村人たちが、記者たちを殺害したことを裏付けるものだった。また、人類学者や歴史学者たちの報告は、イキチャ族<sup>18)</sup>の歴史的背景や高地の村のインディオとそれより下方にあるメスティソの村の人々の関係を分析する一般的な内容であった。

報告書ではいくつかのことが謎のまま残された。その一つは道案内をしたファン・アルグメドのことである。当時、調査委員会はその死を確信していたが、十分な証言が得られず遺体も発見されなかった。アルグメドの遺体はずっと後になって山中で発見された。また、村人たちは記者たちがセンデロを表す赤い旗をもって村に到着したと証言したが、村人たちが証拠として提出した赤い旗の出所は不明であった。

事件から4ヶ月たって殺害されたカメラマンの一人、レットのカメラが山中で発見された。事件直後に記者たちの遺留品として当局が受け取ったのは未使用のフィルムのみで、撮影されたものは含まれていなかった。そこには、記者たちが記念撮影をしたり、山道を歩く姿が写っていた。そして、荷物を足元に置き、両手をあげて人々に囲まれる記者たちの後ろ姿も写っていた。レットは最期までシャッターを押し続けたことが伺える。

調査委員会での経験についてリョサは、報告書を提出してから約3ヵ月後にベルーの有力紙『エル・コメルシオ』紙に6月7日付けで次のように書いている<sup>19)</sup>。

彼らは<無知な者たち>だった。あの3月14日に、ウチュラハイ近辺の人々が心配していたのは、過去ではなく未来、つまり<センデリスタ><sup>20)</sup>たちのことだった。われわれを守りに来てくれるように<スインチス><sup>21)</sup>に頼もうか？少なくとも三挺の小銃を送ってくれるよう<政府さん>に頼もうか？集会が始まったとき、私は委員会に助言者として加わっていた人類学者の忠告に従って、地面に焼酎を撒き、彼等の守護神、ラスウィルカ<sup>22)</sup>に敬意を表して飲み、ココアの葉を分け与え、通訳を通して、われわれを取り囲んだ何百人もの共同体の人々に、

18) ワンタからタンボにかけての高地に住むインディオのこと。

19) この文章の邦訳は、世界の文学全集のラテンアメリカを扱った巻の短編集のなかにおさめられて1990年に出版されている。

20) センデロのメンバーのこと。

21) シンチスのこと。

22) 雪を白くかぶった高峰ラスウィルカ (Raswillca) 山のこと。インカ時代から聖なる山として崇拝されており、現在も地域の人々に崇拝されている。酒やココアの葉は聖なる山への供物となっている。アンデスの人々は酒を飲んだりココアの葉を噛んだりする際は、神々に捧げてから口にする (詳しくは [細谷1997] 参照)。

ペルーの法律は殺人を禁じており、刑を科したり裁いたりするために裁判官がおり、法律を履行するためには当局があることを説明しようと努めた。[バルガス＝リヨサ1990：1083-1084]

バルガス・リヨサのこの記述は一見理にかなったようにみえるが、当時のアヤクチョ県の農村部の状況を鑑みれば空疎な響きをもつ。なぜなら後述するようにウチュラハイ村の人々は、当局や司法から見捨てられた状況の中で生きていた。つまりセンデロによる略奪や農村部の人々の殺害が起こっていたにもかかわらず、警察も政府も司法関係者も適切な対応をしてこなかった。一方、彼等の要求は村が直面していた状況や、以後村に起こったことを勘案すれば自然なことであった。後に政府は農民たちに武器を渡し、農民自警団を組織していく。

しかし、他方でバルガス・リヨサは事件の深刻さを、調査委員会の報告書の提出後にアヤクチョ県の農村で起こった事件の報道により、ある程度認識することになった。少々引用が長くなるが、以下の記述は事件後にウチュラハイ村に起こったことが決して例外的なことではなかったこと、当時の村の人々の心配や反応が、平穏な場所からきた調査委員会の人々には異常なことにみえても、彼らがセンデロとの戦いの真只中にいたことを考えれば自然な流れであった、そのずれを示している。

ウチュラハイの犯罪は身の毛のよだつものであった。そして、それが起きた状況を知ったからといって、それを免罪にするものではない。しかし、状況を知ることが、それをより理解しやすいものとしてくれる。この犯罪のなかにみられる暴力はわれわれを驚かすが、それはこうした暴力が、われわれの日常生活においては異常だからである。イキチャ族の者にとっては、そうした暴力は環境そのものであって、彼等は生まれてから死ぬまで、その中を動きまわっているのだ。われわれがアヤクチョ<sup>23)</sup>に行ってからひと月経つか経たないうちに、イキチャの人々がセンデロ・ルミノソの復讐を恐れてパニックに陥っていたのが理由のないことではなかったことが、別の悲劇によって確認された。その事件というのは、ウチュラハイ村から約二百キロ離れたルカナマルカで起きた。その土地の共同体の人々はそれまでセンデロ・ルミノソに協力してきたが、食料の問題でゲリラと悶着を起こした。その時、ルカナマルカのインディオは二、三人のゲリラ

23) アヤクチョのこと。スペイン語でアクセントがくる箇所に関して日本語で表記する際、長音符号を用いるかどうかは訳者によって異なる。センデロ、メスティーンなども同様。

を捕らえ、彼等をワカサンコの警察に引渡した。四月二十三日、敵対関係にある共同体の何百人というインディオを従えたセンドロ・ルミノソの四箇分隊が、懲罰のためにルカナマルカに入った。七十七名の人間が村の広場で殺されたが、数名が銃撃によるほかは、大部分が斧や、山刀や石によるものだった。首を斬られ、手足を切り取られた者のなかには、四人の子供が入っていた。[バルガス＝リョサ1990：1085]

しかし、ルカナマルカ村での虐殺事件の報道は、日々の様々なニュースのなかに埋没していった。しかも、これをもとにウチュラハイ村事件の再考がなされることもなかった。マスメディアの関心や議論は、誰が記者たちを殺害したかということに焦点が当てられ続けた。いくつかの新聞や雑誌は、記者たちを殺害したのがシンチスもしくは政府軍であるというキャンペーンをおこなった。そこには、レットの写真を証拠として、アンデスのインディオ農民が腕時計を所持したり、革の編み上げ靴をはいているのはおかしいという、一方的なイメージに基づいた議論も含まれていた。

事件後、殺害された記者たちは英雄として称えられペルーのジャーナリスト協会から表彰された。また、政府は遺族に家を贈った。しかし、ウチュラハイ村の本格的な悲劇は事件後はじまった。8名の記者の死がきっかけとなり、村はセンドロ・ルミノソによる襲撃を何度もうけることになった。そして1984年にはウチュラハイ村は廃墟となり、人っ子一人住まない草が生い茂る場所となった。一つの村が消滅してしまったのである。

#### IV. 事件への道程

センドロのリーダーであるグスマンを逮捕した後、事件から10年後の1993年、フジモリ大統領は荒廃した農村部を再建するために、暴力の時代に村を去り各地に散らばっていた人々を出身村に戻す帰還政策を打ち出した(「帰還支援計画」[Programa de Apoyo al Repoblamiento, PAR])。これにより他郷に散らばっていたウチュラハイ村の人々も、徐々に村に戻りつつある。次に、筆者がこの新しいウチュラハイ村及びアヤクチョ県、リマ等で実施したインタビュー調査に基づき、事件の背景についてみていくことにしよう。

ウチュラハイ村の人々がなぜ記者たちを殺害したかということについては、調査

委員会の報告書に記録されたことと同様に、現在も村人たちは次のように語っている。事件の1週間くらい前、シンチスがやって来て、よそ者が来たら捕まえて殺害するようにと告げた。自分たちはヘリコプターで来るので、歩いてやって来るよそ者がいたらテロリストであるので捕まえて殺すようにと命令した。アヤクチョ県の農村部では、政府が軍を派遣した後は政府軍もシンチスの名で呼ばれることがある。

記者たちを殺害した理由としてもう一つあげているのは、記者たちが村に来た時、自分たちは「ペリオディスタ (periodista、スペイン語で記者の意)」であると言ったが、大半がスペイン語を解さず、記者が何であるかも知らなかった村人は、「ペリオディスタ」という言葉を「テロリスタ (terrorista、スペイン語でテロリストの意)」という言葉と聞き間違え殺害に及んだということである。これも調査委員会の報告書に記録されたことと同じである。この2点がウチュラハイ村の人々がなぜ記者たちを殺害するという過ちを犯すにいたったかということに関する、いわばマスター・ナラティヴとなっている。

一番目の理由についてはその背景についてももう少し、説明しておく必要があるだろう。先述のようにシンチスを派遣したベラウンデ大統領は、センデロの活動を軽視していた。さらに文民政権が誕生した直後であったため、軍を動かすことで軍部の力が再び強まることを懸念した。ペルーのこれまでの政治は、農地改革に代表されるペルー革命をおこなったのが、軍事政権であったベラスコ大統領であるという、通常の政治学の理論からみれば奇妙なよじれを示していた。そして、ベラスコ政権が誕生する際にクーデターをおこなった相手こそが、ベラウンデ大統領だったのである。ベラウンデはこの苦い経験をひきずっていた。

しかし、いくら武器が乏しいとはいえすでに武装闘争を開始している相手に対して、軍隊ではない警察の装備では十分対処することができなかった。また、アンデスという人種的にも文化的にも言語的にも異なる世界についてシンチスは無知であり十分な功績をあげることができなかった。しかも、シンチスたちがインディオ農民に対して略奪をはじめとする犯罪的行為をする例も少なくなかった。

政府は1982年末に漸くアヤクチョ県をはじめとする非常事態地域に政府軍を派遣することを決定する。その直後にワイチャオ村の人々がセンデロのメンバーたちを殺害したということは、政府や軍にとっては農民とセンデロが一体でないことを示す格好の宣伝材料となった。先述のように当時反体制派や左翼系の人々の間では、センデロは貧しい農民のために闘うゲリラ・グループであり、そのセンデロが理由なく農民に危害を及ぼすはずはない。一連の情報は当局が捏造し喧伝しているので

はないかという見方が流布していたからである。ケチュア語話者が住む農村部と、アヤクチョ市やリマとの間は、物理的距離以上に社会、文化的距離が非常に大きかった。

アヤクチョ県に派遣された海軍は当時毎週日曜日にアヤクチョ市の中心広場プラサ・デ・アルマスで国旗掲揚をおこなった後、記者会見をひらいていた。エル・コメルシオ紙はワイチャオ村の出来事を伝える記者会見について1月24日の記事で次のように伝えている。

アメリカ大陸の独立に英雄的役割を果たした人々の血をひくアヤクチョの人々が、ちっぽけな殺人集団から防衛する時がきたとノエル・モラル将軍は付け加えた・・・ノエル・モラル将軍は、政府軍が共産主義を排除するあらゆる共同体の安全を保障すると宣言した。

アヤクチョ県に派遣されていた海軍のノエル・モラル将軍は上述のように、センドロのメンバーを殺害したワイチャオ村の人々の行為を、スペインからの独立を決定づけた「アヤクチョの戦い」を引き合いにだして、英雄的行為として称えた。また、ベラスコ大統領もワイチャオ村の村人の行為を称賛した。

ワイチャオ村で村人たちがセンドロを捕らえ殺害した時、地域の人々はセンドロに抗戦する方向へと傾いていた。ワイチャオ村の出来事を伝える新聞記事の写真は旗を掲げて隊列をなして歩く地域の人々の様子を伝えている。センドロは自らの教義に基づき貨幣経済をなくし、自給自足経済をおこなうことを農民たちに強制するために、農民たちが生産物の売買をおこない塩や衣服や食器などの日用品を手に入れた市を閉鎖した。当時センドロはワンタとタンボの間にある高地の地域を支配下におきつつあった。センドロによる家畜や作物の略奪、村人の殺害等に悩まされてきた地域の人々にとって、それはセンドロとの闘いの宣言であった。センドロがおこなった略奪はセンドロたちにとっては革命税であっても、農民たちにとっては泥棒（ケチュア語でスワ [suwa]）として映った。ワイチャオ村の行為が政府軍や大統領によって奨励されたことは、村人たちの闘いが軍や政府によって承認されたことを意味していた。記者たちがウチュラハイ村に到着したのはまさにこうした時だった。

## V. 村落内部の葛藤とセンデロの侵入

次にセンデロとの関わりにおいて、ウチュラハイ村内部が当時どのような状況におかれていたかみていくことにしよう。ペルーではベラスコ政権下で農地改革がおこなわれたが、この農地改革はあまりにも急進的なものであっただけでなく、大土地所有者のみならず、中小規模の土地の所有者の農地までも細分化させることになった。それだけでなく、それまでアセンダード (hacendado、農園主) たちが管理、経営してきた農村経済が、いきなり経験のない農民たちの手に委ねられることになった。

農地改革以前、ウチュラハイ村は姻戚関係にある2人のアセンダードのアシエンダに属していた。アセンダードたちは通常はワントの街に住んでいたが、村の中心広場プラサ (Plaza) の傍らにアセンダードの家があった。そこに、生産物を置く倉庫もあった。そして、農地改革とともに、一方のアシエンダの土地の所有権は農民共同体 (comunidad campesina) に移り、他方のアシエンダは暴力の時代後に村人が帰還するまでアセンダードに属していた。

ウチュラハイ村の問題は、農地改革によって農民共同体になった側で持ち上がった。村人たちは村の有力者が村の土地を自分のものにしてしようとしていると考えたのである。この有力者カルロス (仮名) は、アシエンダの土地を共同体所有にするために奔走した人物である。ここにもう一人の重要な人物がいる。ペドロ (仮名) は商人として旅をしており、スペイン語がある程度話せた。ペドロは音楽家として近隣の村の祭りに招待されて演奏することもよくあった。当時はまだスペイン語を話せる村人が少なく、村の外で長期にわたって働いた経験をもつ者も少なかったウチュラハイ村において、ペドロはある程度特別な存在であった。もちろん村は外界から孤立していたわけではなく、ワントやタンボなどの近隣の街との行き来もあったし、恒常的にセルバに村人たちが働きに行っていた。リマに行った若者すらいた。

このペドロはカルロスの家畜が盗まれた時、家畜泥棒の嫌疑をかけられ村の有力者であったカルロスらに処罰された。この事件により、ペドロはカルロスたちのことを恨んでいた。村の人々は、このような対立と葛藤を背景としてペドロがセンデロたちを村に招き入れたのではないかと考えている。アヤクチョ県においてセンデロは村落内の葛藤や村落間の紛争を利用してきている。

センデロたちが村に来るようになった頃、最初は商人を装って一軒一軒まわった。その後、徐々に村人たちに革命に参加するよう説いていった。はじめのうち村人た

ちは、彼らが何をしようとしているのかよくわからなかった。そのうちにセンデロの何人かは村の小学校教員とともに寝泊りするようになった。ウチュラハイ村には当時4年生まで学ぶことができる小学校があった<sup>24)</sup>。村の小学校には離村の教員として派遣されていた女性教員アンヘリカ（仮名）がいた。離村の教員は通常村に住み込み、派遣された村と自宅との距離により、毎週末や数ヶ月に一度、あるいは休暇の時期にのみ帰宅する。

アンヘリカはワマンガ大学で学び、1981年からウチュラハイ村で教員として働きはじめた。センデロたちは、彼女がアヤクチョ市等に行って村をあけている間、学校で革命教育をおこなうようになった。ここで付け加えておくと、ペルーの農村部の小学校で学んでいるのは低学年の児童のみではない。親が子供に対して学校に通うより家の手伝いをするを望んでいたり、生活するために働かなければならなかったりするために、学年相当の年齢で学校に通うことが難しいケースがある。また、女性に学校教育は必要ないという偏見も根強い。このため、当時村の小学校では男児を中心に様々な年齢層の少年や青年がともに学んでいた。この結果、村落内にもセンデロのシンパとなった若者たちがあらわれた。ウチュラハイ村の例に限らず、一般に農村部でセンデロに加わった者は若者が多かった。

センデロがワマンガ大学を拠点として組織化をはじめた時期は、教員数が増員された時期と前後していた。ワマンガ大学で学んだ学生のうち、多くの学生が教員となってアヤクチョ県内の農村部に散らばっていった [McClintock 1989]。農村部において学校教員は特別な位置づけにある。教員が同じ村出身者でない場合、唯一外部からきて常時村にいるよそ者である。しかも単によそ者というだけでなく、アンデスの先住民族共同体において、教員はインディオである村人たちに対してミステイである。当時、派遣された教員がすでにセンデロの教義の洗礼を受けている場合もあったが、センデロによって村人に革命教育をすることを強制された例もみられた。そして、従わない場合は殺害された。

調査委員会の報告書を読む限り、委員会はウチュラハイ村の小学校でおこっていたことを認識していなかった。事件後、調査委員会にとってアンヘリカは唯一ウチュラハイ村に居住していたインディオではない人物であり、スペイン語でしかもミステイの観点から村の事情を伝え証言することができる存在だった。彼女は村へのセンデロの侵入を否定した。

---

24) 現在も村にあるのは小学校のみである。

村人の間にもセンデロのシンバが現れるなか、1982年10月の聖ロサの祭りの日に一つの事件が起きた。村にセンデロの赤旗が掲げられたのを見て、カルロスがこれを破り捨てたのである。これに対して、センデロは報復として、カルロスを村人たちの目の前で公開処刑した。同じ年の12月にセンデロはカルロスの家に押し入って捕まえ、その際に抵抗した婿嫁が両腿を撃たれた。それからセンデロたちは村人たちをプラサに招集し、その前に捕まえたカルロスを引きだした。そして、彼の罪状をあげ、その罪が死に値するかと人々に問いかけた。当時センデロの武器は貧しいものであったとはいえ、銃をかまえている者がおり、村人たちは逆らうことができなかった。

この公開処刑は、センデロが支配下においた農村部で頻繁におこなっていた。その対象となったのは、センデロに従わない村の有力者、役職者、商人、村人一般であった。しかし、いわゆる「搾取する有産階級の人々」ではなかった。農村部において村人を搾取しているという理由でセンデロによって公開処刑された人々の大部分が、村においては多少他の人々より裕福であっても、ペルー社会全体からみれば底辺もしくは貧困層に属する人々だった。センデロは従わない者たちを処刑していくことで、村人に恐怖心を植えつけ従わせた。センデロは従わない者たち、もしくは当局に通報しようとする人々をケチュア語でヤナ・ウマ (yana uma、「黒い頭」の意) と呼んだ。

カルロスの処刑をおこなったとき、センデロたちは村の他の役職に就いている人々も探した。ウチュラハイ村の役職者及び有力者たちは反センデロの立場にあったからである。なかにはこのとき役職者であったがセンデロの追及からかろうじて逃れ、その後は別の村に住むことになった村人もいた。センデロによるカルロスの殺害については、ウチュラハイ事件に関する調査委員会も情報を得ていたが、その殺害の状況に関して詳細は把握しておらず、重視されなかった。

## VI. 事件前後

記者が村に到着した当日の朝に、村では一つの騒動があった。村の要職に就いている人々が、ペドロのまだ年若い甥アルフレッド (仮名) に対して、センデロの仲間でないのならそれを証明するために罰として酒を支払うようにと要求したのである。アルフレッドは当時ワントの街で商売の手伝いをして働いていた。アルフレッドは自分がセンデロと関わりがないことを示すために酒を払った。アンデスの農村

の習慣として、罰金として現金ではなく酒を支払うことはよくある。相手に何か依頼する時も酒を贈る。このため、記者が到着したまさにその時、殺害に関与した村の役職者たちはこの酒を飲んで酔っ払っていた。

ウチュラハイ村を通過しようとした記者たちは、村人たちに囲まれ自分たちはペリオディスタだと主張した。しかし、スペイン語のわからない村人たちはこれをテロリストと聞き間違えた。当時村の中でスペイン語を解する人物は少なかった。記者たちのなかにはケチュア語を話せる者もいたが、酒を飲んでいた村の役職者との間には対話が成立しなかったのかもしれない。それ以上に、政府軍の命令があった一方、センデロとの闘いの渦中にある村人たちにとって、突然あらわれたミスティたちとの間に対話が成立する余裕がなかったのかもしれない。

アルフレッドによると、その時記者たちの一人が、街で働いていたために村の人々とは異なる服装をしていたアルフレッドを呼び寄せ、スペイン語がわかるかと尋ねた。そして、自分たちはテロリストではなくペリオディスタであると伝えてくれと頼んだ。しかし、村の有力者たちは年若いアルフレッドのいうことに耳を貸さず、殴りつけた。さらに、その場に居合わせたスペイン語がわかるペドロも、彼らはテロリストではなく記者だと説明しようとしたが、殺害をとめることができなかった。

一方、ウチュラハイ村に到着する前に記者たちと別れたアルグメドは、連れてきたラバに乗って逃げようとした。しかし、追いついた村人たちによって殺害された。彼の遺体は記者たちとともに埋葬されることはなかった。前述のように当時村人たちは、アルグメドの殺害に関しては調査委員会に語らなかった。

ペドロはアルグメドと既知の間柄だったことから、アルグメドをかばおうとした。アルグメドの母は息子たちを学校に通わせる費用を稼ぐため、商人としてウチュラハイ村に来ることがあった。その際に、同じく村で商売をしていたペドロと知り合っている。また、このようなことからアルグメドの母テレサには、ウチュラハイ村に知人やコンパドレ関係にある人々がいた。ペドロもその夜、村人たちによって殺害され、記者たちとは別に村の共同墓地に埋葬された。

ペドロに関しては、調査委員会の報告ではアルグメドの家族が村人からきいた話として、泥棒をかばおうとして捕まっていたウチュラハイ村の村人が1名、アルグメドとともに殺されたということが、事実を確認できなかった事柄として記されている。ただし、注意しなければならないのは、当時村では泥棒というケチュア語の単語とテロリストという単語は並列して用いられていた。

筆者のインタビュー調査で得た証言によると、村人たちはペドロの家に火を放つ

た。そして、放牧から戻ってきたペドロの妻も捕まえ殺害しようとした。しかし、彼女は石や棒を持って取り囲む村人たちに、もし自分が死んだら幼い子供たちが孤児になってしまい誰も養う人がいなくなるので、子供たちもいっしょに殺して欲しいと叫んだ。そして、その場に居合わせた別の村人も、もし子供たちをペドロの妻といっしょに殺さなければ、成長したときにきっと村人たちを恨むことになるだろう、と彼女を弁護した。これにより、村人たちは彼女の殺害を思い留まった。ただし、その際にペドロの妻は起こったことを決して口外しないようにと誓わせられた。それ故、アルグメドの家族が、何か知っているのではないかと彼女を探しに来たときも、当局が調査に来た時も身を隠した。

さて、これまでみてきたように村人たちによる記者の殺害は、当時のウチュラハイ村がおかれていた状況を背景とし、一連の出来事の展開の帰結として起こったことがわかる。まず、当時ウチュラハイ村やその地域はセンデロによる略奪と殺戮のなかにあった。村人たちはセンデロによる襲撃を受ける可能性を案じていた。

さらに、記者たちが村人たちによってテロリストだということで殺害されそうになった時に、スペイン語が話せたために彼らはテロリストではないということで記者たちとアルグメドを弁護しようとした人物たち、その人物たちこそがまさに村人たちからセンデロのメンバーであるとみなされていた。つまり、センデロのメンバーであると村人がみなしている人物たちが記者たちを擁護しようとしたということは、村人からみれば逆に記者たちをセンデロの仲間であるとみなす根拠を提供したことは想像に難くない。

このようにみえてくると、ウチュラハイ村で起こった事件は、無知な人々によって引き起こされた異常な事件などではないことが理解できる。しかし、当時まだテロの危機を感じていず、センデロがどのような組織であり、どのようなことを行っていたかということに関して十分な知識をもたなかったリマの人々にとっては、ウチュラハイ村の事件は無知で野蛮なインディオ＝農民たちが引き起こした異常な事件として映った。

事件後政府は14名の村人を逮捕した。そして3名が直接関与したとされ長期に亘って投獄されることになった。このうち一名は獄中で亡くなっている。また、事件後行方がわからなくなった役職者の一人は、後にセンデロによって殺害された。さらに、カルロスとともにペドロを告発した村人も自らの身の危険を感じ、家族にも危害が及ぶことを懼れ服毒自殺した。しかし、ウチュラハイ村の本格的な悲劇は事件後にはじまった。

## Ⅶ. センデロと政府軍による虐殺

事件後、記者たちをセンデロと誤って殺害したことから、ウチュラハイ村はセンデロによって反革命的な村、センデロに敵対する村とみなされた。そしてウチュラハイ村はセンデロによる襲撃をうけることになった。最も人々が記憶している襲撃は、7月の聖母カルメンの祭りの日におこなわれたものである。私たちは村という往々にして各戸が集まって住んでいる集落を想像するが、牧畜と農耕を営み4000mの高度差を利用しながら生業活動を営んでいるアンデス高地の村は、必ずしも村人たちが集まって住んでいるわけではない。村人たちは農耕や牧畜活動の必要性により、高度に応じて家もしくは小屋をいくつか所有している。そして、高度によって異なる種類の作物の植え付けや収穫などをするため、時期によって移動する。また、リヤマ、アルパカ、ヒツジなどの家畜の放牧をするためには、ある程度散逸して居住する必要がある。

再建された現在のウチュラハイ村では人々がプラサを中心にまとまって住んでいるが、センデロの攻撃によって放棄される以前のウチュラハイ村の人々は、広範囲に散らばって居住していた。このため、祭りは人々が集まる機会であり、見方を変えればセンデロにとっては最も効率的に襲撃をおこなえる機会でもあった。襲撃は聖母カルメンの祭りの最後の日、人々が祭りのカルゴ (cargo) をした人物<sup>25)</sup> の家に集まり酒を飲んで祝っていた、7月16日の夕刻から夜半にかけておこなわれた。虐殺の舞台となった場所は海拔約4000mの高度にある。正面には村の守護神となっている白雪を抱いたラスウィルカ山がくっきりと山容をあらわし、湖では水鳥が遊ぶ。この美しい風景の場所には現在は住む人々を失った廃屋が点在している。

聖母カルメンの虐殺で注意をひくのは、センデロたちが村人たちのなかから、記者たちの殺害に直接関わった人物とそうでない人物を識別し、関わった人物のみを殺害していった点である。つまり、センデロは十分な情報収集をしていたことが伺える。聖母カルメンの虐殺の後、大半の人々が身の危険を感じてほとんど着の身着のままの状態で村をあとにした。村に残った人々も、夜間は山中や洞窟に身を隠しセンデロによる襲撃を避けながら暮らすことになった。

それだけに留まらず村の悲劇は様々なかたちで展開していく。センデロたちは残された村人たちに、襲撃に加わるように強制し連行した。このなかには女性も含ま

25) カルゴは責務のことであり、カトリックの祭りで祭りに出資するとともに世話人となること。カルゴには様々なレベルがある。

れていた。村人たちはもし参加しなければ殺すと脅され、襲撃に加わらざるを得なかった。センデロの襲撃に同行させられたある女性は、それが現実とは感じられずまるで悪夢のなかにいるようであったと証言している。しかし、一方で家族も含め多くの人々が目の前で次々に虐殺されていくのを見ることにより、すでに何も感じることができなくなっており、自分も間もなく死ぬであろうと語っている。

さらに、政府軍による虐殺もおこなわれた。政府軍はワントの高地でセンデロがいるとされている村を襲い、村人を無差別に殺戮していった。しかし、往々にして軍の攻撃がおこなわれるときには、すでにセンデロたちは村から逃げ出しており、残された女性や子供、妊婦を含む村人たちが虐殺された。ヘリコプターから爆撃することもあった。政府軍の攻撃はセンデロと異なり夜間ではなく昼間おこなわれた。

政府軍にとっては、人種的にも文化的にも言語的にも異なるインディオ農民を前にして、誰がセンデロの仲間であり誰がそうでないかということを知ることが困難であった。ここでは「同じペルー人」という括りは通用しない。特にアヤクチャョ県に派遣された海軍は、政府軍のなかでもエリートであり概して人種差別意識が強かった。さらに近隣の村の反センデロのグループが村に略奪に来ることもあった。

聖母カルメンの虐殺で父を失ったある女性は、夫が政府軍に殺害された時のことについて次のように語っている。

私たちは（センデロからの攻撃から身を隠して）まるで動物のように山で寝なければなりません。そうした状況にあるとき、海軍がやって来ました。「お前たちはテルコ、terrucoテロリストを指すのに使われていた言葉」だ」そう言って人々を殺害したのです。私の夫も逃げようとして殺されました。夫に発砲したのです。私たちは夫を埋葬することすらできませんでした。犬が夫の遺体を食べるままにしておかざるをえませんでした。軍が「こいつはテルコだ」といって埋葬させてくれなかったからです。

同様のことは汚れた戦争の間アヤクチャョ県全体で広くみられた。もし、テロリストの嫌疑で軍によって殺害された人々を家族が埋葬しようとするれば、その家族もテロリストの仲間とみなされて軍に殺害される可能性があった。このため、遺体を埋葬するどころか引き取ることもできなかったのである。

そして、翌84年の終わりにはウチュラハイ村は完全に廃墟となった。ウチュラハ

イ村を後にした村人たちは、近隣の村やセルバ、ワンタ市やアヤクチョ市、リマへと散らばっていった。アヤクチョ県全体で暴力が拡大していくなかで、逃げ延びた先も決して安全な場所ではなかった。村人の中には村を去った後に、センデロ或いは政府軍によって殺害された人々もいた。

センデロの活動範囲が広がり、国全体が危機的状況に陥り、経済的にも困窮していくなかで、出身村を離れ異郷で暮らさざるをえなかったウチュラハイ村の人々は、辛酸をなめた。自分の村では畑や家畜を所有し生活していた村人たちが、異郷では自らの畑をもつことができず、住む家もなく、他人の畑を耕す日雇い労働者（ペオン、peon）として働かなければならなかった。幼い子供たちを抱えて寡婦となった女性も多かった。それだけでなく、記者たちを虐殺したウチュラハイ村出身であることが偏見と差別の対象となったことから、出身地を隠したり、偽ったりしながら暮らすこともあった<sup>26)</sup>。

1992年9月12日、ついにカリスマ的リーダーであったグスマンが政府によって逮捕されたことで、テロは鎮静化していった。グスマンを逮捕した時、政府は囚人服を着せ檻に入れた姿をマスメディアに流した。人道的見地からみれば、これは許し難いことだが、政府は様々な伝説や神話にとりまかれたグスマンを、確かに捕らえたことを知らしめる必要があった。しかも、グスマンを生きたまま逮捕するということは彼を殉教者にせず、さらに逮捕が政府の捏造ではないことを示すための優先事項だった。

この後、政府が帰還支援政策をとったことで、各地に散らばっていたウチュラハイ村出身の人々は村出身の有志によるラジオを通じての呼びかけに応じて会合を繰り返し、村に帰る準備をした。そして1993年10月10日、最初の帰還者の家族が政府軍に守られたかたちで村に戻った。当時はまだセンデロの襲撃を受ける可能性が存在していたからである。家族を失った深いトラウマから、或いはいつ再びセンデロによる襲撃を受けるかもわからないという不安や恐怖心から村へ戻ることを拒否した人々もいた。最初の帰還者たちが村に戻ったとき、かつて村があった場所は雑草が生い茂っており、家も畑もなく、料理するための鍋窯も食料もないという状態だった。このため、先に帰還した近隣の村の人々やNGO、政府などの援助を受けながら、文字通り一から村の再建がはじめられた。軍は安全を確認できるまで、数年

26) また、暴力の時代にはアヤクチョ県出身者がアヤクチョ県外に移住した場合、偏見からセンデロのメンバーであるとみなされる可能性があったので、出身地を隠すことがあった。検問もアヤクチョ県出身者に対しては厳しかった。

間にわたって野営地を設置した。一方村人たちも政府軍にいた経験をもつ村出身の若者の指導のもと、銃で武装した自警団を組織した。

現在村の平均年齢は若い。当時成人であった村人の多くがセンデロによる村への襲撃のなかで、あるいは逃げ延びた先で汚れた戦争の犠牲となり亡くなったからである。また寡婦の姿も目に付く。このことは暴力の時代の爪痕の深さを如実に示す。わずかな数の家族からはじまった新しいウチュラハイ村は、最初の帰還者たちの生活ぶりをみることで徐々に人々が戻り人口が増えつつある。村では毎年10月10日を帰還の日として祝っている。しかし、かつて村をあげて盛大に祝われた聖人の祭りは最早存在しない。センデロによる襲撃とともに村の教会は破壊され、鐘や内部にあった聖像は近隣の村人に略奪されたまま放置されている。カトリック教徒であった村人たちの間でプロテスタントの信者が急増していることも、聖人の祭がおこなわれなくなった理由となっている。

## おわりに —真相究明と和解委員会、 ポストコロニアルの歴史—

第IV節でみたバルガス・リヨサの記述にみられるように、事件後調査委員会のメンバーが調査に来たとき、ウチュラハイ村の人々が銃をのぞんだのは、彼らが無防備で銃をもったセンデロと対峙しなければならなかったからである。もちろん先述のようにセンデロの装備とて当時は乏しかった。しかし、オンダ (honda、投石具) や斧や山刀しかもたない農民に対する威力は大きかった。彼らは武装したセンデロに、警察や軍による保護もないまま立ち向かわなければならなかったのである。センデロの武装蜂起はすでに1980年にはじまっていたにもかかわらず、政府も法もインディオ＝農民たちを保護するために十分な対策を講じなかった。それどころか、政府軍が派遣されてからは軍による住民の殺戮がおこなわれた。

8名の記者の死の後、ウチュラハイ村は消滅した。どれだけの数の村人が殺害されたのかその正確な数はわからない。真相究明と和解委員会の調査で確認されただけでも、135名の名前があげられている。8名の記者の死には対応した同じ政府が、予測しえたこれらの人々の死には対応しなかった。そこにはペルーが独立後も引きずってきた人種間のヘゲモニー関係、シエラとコスタの関係などの問題が横たわっている。

ウチュラハイ村で殺害された記者の遺族の中には、現在も記者たちを殺害したの

はシンチスもしくは政府軍であると考えている人々がいる。これにより、政府に対して賠償金を求めて訴訟をおこそうとする動きもある。しかし、このことは単に遺族の問題のみに還元できず、これまでみてきたように、反体制派や左翼系の人々、人権団体等の対応とも関わる。センデロが武装闘争を開始した初期の段階では、政府とは立場は異なるがこれらの人々のセンデロに対する認識も甘かった。センデロがインディオ農民を虐殺している事実は十分認識されていず、貧しい農民のために活動しているというイメージがかなり後になるまで流布していた。調査委員会による報告がおこなわれた後も、左翼系の新聞や雑誌は記者たちの殺害が農民に偽装したシンチスもしくは政府軍によっておこなわれたのではないかという告発を続けた。そして、議論は当時のアヤクチョ県の農村部がおかれていた状況よりも、誰が記者たちを殺害したかということに焦点が当てられてきた。

ウチュラハイ村の事件がどのようなかたちで記録され、歴史となり、記憶されるのか。8名の記者たちは英雄としてその栄誉を讃えられても、ウチュラハイ村の名は依然として記者たちを殺害したインディオ＝農民の村として記憶されている。毎年、1月26日にはウチュラハイ村で亡くなった記者の家族たちによる慰霊祭が催され、取材記者たちが訪れる。しかし、その際にウチュラハイ村の村人たちが辿った歴史や、その犠牲者たちに関心が向けられることはない<sup>27)</sup>。

2003年8月28日に真相究明と和解委員会の最終報告書が政府に提出された。この報告書は提出される以前から内容そのものよりも様々なレベルでの政治的議論の渦中におかれた。報告書が提出されたトレド政権は危機的状況にあり、しかも持続的な政党基盤をもたないため、政治家たちはすでに次期政権を視野に入れて動きは始めている。フジモリが日本に逃亡した後、トレドが2001年の選挙で争った相手はアブラ党のアラン・ガルシア (Alan García) であった。ガルシアは1985年に大統領に就任し、1990年にフジモリと交代している。つまり、ガルシア大統領の就任期間は暴力の時代と重なっている。それ故、ガルシアの次期大統領就任という青写真を描いた場合、ガルシア政権下での問題を追及することは難しい。また、非常事態宣言をだしてきており、軍の援助も欲しいトレド大統領にとって、この問題で軍を批判することができない。

さらに特徴的だったのは、真相究明と和解委員会の報告書の提出後、論議の主たる対象となったのが1990年以降のことであったという点である。これにはいくつか

27) 事件の20周年にあたる2003年の1月26日においても、各メディアは記者たちの勇気と栄誉を讃えるのみであり、その後ウチュラハイ村でおこった虐殺を扱うことはほとんどなかった。

の理由がある。暴力の時代の被害の規模から考えれば1990年以降は末期にあたるが、この時期はフジモリ政権下に相当する。このため、反フジモリを掲げて就任したトレド政権にとっても、他の政治家たちにとっても、現在日本に逃亡しているため不在のフジモリ元大統領の政権下での人権侵害の批判をおこなうことは比較的容易である。

しかし、理由はそれにとどまらない。すでに述べたように、センデロが「農村が都市を囲む」という戦略をとったため、首都リマの中産階級以上の人々が本格的にテロを意識するようになったのは、1990年代に入ってからであった。しかもペルーのメディアはリマに集中しているという情報環境がある。このためマスメディアの議論も1990年代以降に集中した。

他方、被害が大きかった農村部においては、様々な課題が残った。この点をウチュラハイ村の例を視野に入れつつ整理してみよう。まず、証言する側についてみた場合、インディオ＝農民にとってセンデロが何をしたかということ証言することは、現在センデロの勢力が弱体化している以上、ある程度可能である<sup>28)</sup>。しかし、政府軍が何をしたかということ語ることは難しい。実際、シンチスや政府軍による暴行や略奪、不法逮捕、レイプ、虐殺はおこっていたのだが、それについて証言することは、インディオ＝農民という弱者の立場からは、政府や軍との関係を考えて場合困難な側面がある。また、ウチュラハイ村のように、帰還後数年間にわたって軍隊の保護のもとに暮らした場合、政府軍の兵士と村人の間にアンデスの伝統であるコンパドレ関係が結ばれている例もある。政府軍の兵士との間に新たな関係が生まれた結果、政府軍に対する認識も変化してきている。

また、村においてセンデロのシンパとなっていた人々は、なかなかそのことについて語ろうとはしない。もちろんそこには逮捕されることへの怖れがある。しかし、それだけでなく、先述のように農村部においてセンデロとなった人々には若者が多かった。彼らの多くは必ずしも確固としたイデオロギーに裏打ちされていたわけではない。その後村に起こったことによってむしろ自分たちはセンデロに騙されたと考えるようになっていく。記憶は現在を起点として構成されるが、村人たちの記憶も事件以降の展開によって再構成されつつある。

さらに、真相究明と和解委員会の「和解」という側面について考えた場合、暴力の時代に農村部でみられたのは単なる外部との戦いではなかった。村落内の葛藤、

28) ただし、トレド現政権下の政治的不安定により、センデロが活動を再開している地域がある。このため、センデロがゲリラ路線へと戦略を変更したとはいえ、予断を許さない状況にある。

及び近隣の村落間の紛争が、センデロや政府軍との関わりによって拡大した面がみられる。ウチュラハイ村の場合もこれまでみてきたように、村落内の葛藤がセンデロに利用されている。村の人々は現在も、誰がセンデロの側につき、誰が政府の側についたのか、どのような密告がおこなわれ、その結果どのような殺害がおこったのかを記憶している。たとえ当事者たちがすでに死亡していたとしても、家族や親族、友人は村で生活している。真実を解明していくこと、それはこれらの出来事やその記憶を再び明るみに出す可能性を含んでいる。それ故、村において生活を続けていこうとしている人々にとっては、新たな葛藤と紛争を引き起こしかねないという懸念が存在している。このためウチュラハイ村では、村人同士が暴力の時代におこったことに対して和解し、ともに暮らしていくことを村会等で繰り返し確認してきている。

最後に、真相究明と和解委員会の最終報告書は政府に提出されたが、それはある意味で起点に位置する。真相究明と和解委員会の実質的活動期間は短く、そこで明らかにされたことは暴力の時代の全てではない。また、委員会のメンバーの一人であったカルロス・イバン・デグレゴリが述べたように<sup>29)</sup>、後から委員会の名称として付け加えられた「和解」という言葉は、委員会にとっては過重となった。現実には委員会は「和解」という部分にまでは関与していない。20年以上という長期間に及んだ暴力の時代に起こった記憶の発掘と事実の解明、及び和解には時間が必要とされる。しかし、一方で真相究明と和解委員会の最終報告書が提出されたことは、暴力の時代の記憶をいかに歴史化していくかという局面にペルー社会が足を踏み入れたことを意味している。

本章でみてきたように暴力の時代の犠牲者のうち先住民族人口の割合が著しく高いことの根底には、ペルー社会において先住民族がおかれている状況がある。植民地時代に形成された人種間のヘゲモニー関係は、独立後の国家の内部において再生産されてきた。それ故、暴力の時代を国家の歴史的時間の枠組みの内においてのみとらえようとすれば、我々は問題の所在を見誤ることになるだろう。植民地時代に生まれた人種間の関係を踏襲しつつ、国民国家が形成されてきているポストコロニアルの状況への視点抜きには、暴力の時代に表出した暴力の根源と向き合うことはできない。暴力の時代の国家及び先住民族の経験をいかに歴史化していくかということに関しては、国民国家の歴史と民族の記憶という枠組みにおける関係だけでは

29) ラテンアメリカ・カリブ研究国際連盟 (FIEALC) 第11回大会 (2003年 大阪於) での筆者の質問への回答。

なく、歴史のなかで生まれた先住民族という存在と国民国家の歴史という、重なりつつも微妙なずれを含んだ位相を照射していく必要があるだろう。

## 参考文献

アンダーソン、ベネディクト

1987 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』白石隆・白石さや訳 リプロポート。

遅野井茂雄

1995 『現代ペルーとフジモリ政権』アジア経済研究所。

岸本康

2000 *Krzysztof Wodiczko : Projection in Hiroshima*. ウーファー・アート・ドキュメンタリー (VHS)。

崎山政毅

2001 『サバルタンと歴史』青土社。

スピヴァック、ガヤトリ・チャクラヴォルティ

1998 『サバルタンは語るができるか』上村忠男訳、みすず書房。

バルガス=リョサ、マリオ

1990 「ある虐殺の真相」『[世界の文学] 19ラテンアメリカ』桑名一博訳、集英社、1059-1088ページ。

細谷広美

1997 『アンデスの宗教的世界—ペルーにおける山の神信仰の現在性—』明石書店。

2000a 「書評 David Nugent, *Modernity at the Edge of Empire : State, Individual, and Nation in the Northern Peruvian Andes, 1885-1935*」『アジア経済』41 (4) : 86-89。

2000b 「国民国家の歴史と民族の記憶—ペルーにおけるインディオとインカ」西川長夫・原毅彦編『ラテンアメリカからの問いかけ』人文書院、238-261ページ。

2002 「植民地主義と他者表象—ペルーにおけるビシュタコをめぐる語りの諸相」山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』pp.415-443関西学院大学出版会。

ルナン、エルネスト他

1997 『国民とは何か』鶴飼哲・大西雅一郎・細見和之・上野成利訳、インスクリプト。

歴史的記憶の回復プロジェクト編

2000 『グアテマラ 虐殺の記憶—歴史的記憶の回復プロジェクト—』飯島みどり・狐崎知己・新川志保子訳、岩波書店。

Battalle, Guillermo Bonfil

1972 “El concepto de indio en América : una categoría de la situación colonial”. *Anales de Antropología* (9) : 105-124.

Comisión Investigadora de los Sucesos de Uchuraccay

1983 *Informe de la Comisión Investigadora de los Sucesos de Uchuraccay*. Lima : Comision Investigadora de los Sucesos de Uchuraccay

Degregori, Carlos Iván

2000 “Panorama de la antropología en el Perú : del estudio del Otro a la construcción de Nosotros diverso”. Degregori (ed.) *No hay país más diverso : compendio de antropología peruana*. Lima : Pontificia Universidad Católica del Perú, Universidad de Pacifico e Instituto de Estudios Peruanos (IEP), pp.20-73.

Gorriti, Gustavo

1990 *Historia de una guerra milenaria en el Perú*. Lima : Editorial Apoyo.

Hosoya, Hiromi

2002 “Entre la historia nacional y la memoria” Mutsuo Yamada y Carlos Iván Degregori (eds.), *Estados nacionales, etnicidad y democracia en América Latina*. JCAS Symposium Series 15, Osaka : The Japan Center for Area Studies pp.195-223.

- 2003 *Memoria post-colonial : El tiempo, espacio y discursos sobre los sucesos de Uchuraccay*.  
Lima : IEP.
- Isbell, Bille Jean  
1978 *To Defend Ourselves : Ecology and Ritual in an Andean Village*. Austin : Institute of Latin  
American Studies, The University of Texas.
- Matos Mar, José  
1984 *Desborde popular y crisis del estado : el nuevo retorno del Perú en la década de 1980*.  
Lima : IEP.
- Mayer, Enrique  
1970 “Meztizo e indio : el concepto social de las relaciones interétnicas” In Jose Matos Mar (ed.)  
*El indio y el poder en el Perú*. Lima : Francisco Monclia Editores.  
1992 “Peru in Deep Trouble : Mario Vargas Llosa’s “Inquest in the Andes” reexamined”. In George  
E. Marcus (ed.) *Rereading Cultural Anthropology*. Durham, North Carolina : Duke  
University Press. pp.181 – 219.
- McClintock, Cynthia  
1989 “Peru’s Sendero Luminoso Rebellion : Origin and Trajectory”. In Susan Eckstein (ed.),  
*Power and Popular Protest*. California : University of California Press, pp.61 – 101
- NACLA (North American Congress on Latin America)  
1990/1991 *Fatal Attraction : Peru’s Shinning Path*. NACLA Report on the Americas XXIV (4).
- Quijano, Anival  
1980 *Democracia y cultura : lo cholo y el conflicto cultural en el Perú*. Lima : Mosca Azul.
- Scott, David Palmer (ed.)  
1992 *Shining Path of Peru*. New York : St. Martin’s Press.
- Stern, Steve J. (ed.)  
1998 *Shining and Other Paths : War and Society in Peru 1980 – 1995*. Durham, North Carolina :  
Duke University Press.
- Strong, Simon  
1992 *Shining Path*. London : Times Books.